

永島 広紀（朝鮮史学）

日本統治期の朝鮮における「新体制」の史的研究

本論文は、植民地朝鮮の「京城（ソウル）」を中心に知識人層が展開した行政、司法、文化、社会教育の活動をめぐって、新史料を大いに発掘、整理し、その思想と行動が1940年代の近衛内閣の「新体制」運動と諸方面で連関することを説く意欲的な実証研究である。

第一章では、戦時下の朝鮮の総動員体制を担う「国民総力朝鮮連盟」の運営に深く関わった京城帝国大学予科（城大と略す）立正会と同会を母体とする社会教化運動団体の緑旗連盟の設立過程を、新史料を基に考察し、城大予科教授・津田栄と彼のもとに集った城大生の思想と行動は、日蓮宗（国柱会）の天業青年団と里見岸雄の「国体科学」から強い影響を受けていることを明らかにしている。また津田栄を会長とする緑旗連盟の活動は復古的でありながら社会改良を目指し、その対象は「農村問題」「国語・国字問題」「女子教育」「乳幼児健康」等の多岐にわたり、従来の同連盟に対する「総督府の御用団体」という短絡的な評価を退け、権力側が連盟に接近していったことを具体的に検証している。第二章では、緑旗連盟に連なって、朝鮮の大政翼賛会と目される国民総力朝鮮連盟の宣伝部が行った文化運動の内容と推移を、城大哲学科出身の津田剛の思想と行動を中心に検証している。そこで、朝鮮の「新体制」組織の変遷を踏まえて、朝鮮文人報国会による大東亜文学者大会への参加状況を検討し、京城と平壤における地方文化の創出論議に関しても考察を加え、これを主導した津田による朝鮮の「革新」論を、彼が主唱した「生活哲学」の内容から分析し、これを近衛新体制のプランナーたる京都学派の三木清の思想とも比較検討している。第三章では、朝鮮史編修会と城大における修史と研究に跨る「史料編纂」と「歴史叙述」の問題を「漢学」と「国学」の学統が交差する近代日本の「正史」編纂の経緯を踏まえて考察し、「朝鮮史学」はこの二学統に列なる「満鮮史学」と「国史学」によって形成されたと説く。その際、黒板勝美に系譜をもって総督府の修史官と編修官を務めた中村栄孝と、城大朝鮮史学科出身であり緑旗連盟幹部の森田芳夫とを対置させ、朝鮮史研究における「史料」と「史述」の位相を検証し、京都学派の高山岩男の「世界史」論議との連関性にも言及している。第四章では、総督府の文教政策では「国史」と並ぶ「国語」教育の展開のなかで、「表音式仮名遣い」をめぐる国語教科書担当官たる森田梧郎の所論を分析し、その論説が国民総力朝鮮連盟が主導する「国語普及」運動に継承されたことを明らかにしている。第五章では、緑旗連盟婦人部と連盟直営の清和女塾が、京城保護観察所が主宰する国語講習会に人材を提供していたことに着目し、思想犯の「保護観察」と民衆に対する「国語」教育との関係性を、これを推進した思想検事・長崎祐三の来歴と活動の両面から解明している。最終章の第六章では、東学系類似宗教団体（天道教・侍天教）の動向を、在地儒林団体を含めてその再編を狙う朝鮮総督府警務局による「懐柔」と「善導」の過程から整理している。特に国維会系統の革新官僚や農村指導者と朝鮮人イデオログの交接の実態に着目し、彼らが戦時下の朝鮮において独自の位置を固めつつも体制に組み込まれた実像を、韓国併合以前からの団体の状況を踏まえて明らかにしている。

以上、本論文は各章において、新旧の資料の整理を踏まえて、屢々論ぜられる植民地期朝鮮をめぐる「支配と抵抗」の史観に距離を置き、知識人層の行動を日朝の近現代史のなかで分析しており、その成果は学界に貢献する所は大きい。よって、本調査委員会は、論文提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものと認めるものである。